「『教育の情報化』私見」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報科学センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 悦志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4304

【論　壇】

「教育の情報化」私見

吉田　悦志〔二部教務部長〕

私には随分前に観た映画が、脳裡に刻み込まれている。トム・ハンクス主演の「フィラデルフィア」である。きわめて有能な青年弁護士が、ＨＩＶと診断され所属事務所を解雇される。トム・ハンクスが演じたのが、この青年弁護士であった。希望に満ちた順風満帆の人生が約束されていた青年が、突如社会的評価も声望も失ってしまう。この絶望の淵からかれの闘いが始まる。闘いそのものがこの映画の筋立てである。

社会的な偏見、蔑視や差別と闘う青年の姿が、私の脳裡に刻まれたことを説明するのに贅言は要すまい。ことは、映画の筋立て全体に関わるだけではないのである。登場人物の単純明快な「会話」が、私の脳裡に刻み込まれたのである。高名な法律事務所を解雇された青年弁護士は、友人である黒人弁護士に会いに行く。訴訟に向けて、彼はその友人に弁護を依頼する。その時のやりとりが、私には忘れがたいのである。

友人である弁護士は、トム・ハンクスにこう言う。君の言うことが１０歳の小学生にも分かるように説明できたなら、私は君の弁護を引き受けよう。黒人弁護士の常套語なのである。ある時は１４，５歳になったり、幼稚園の子供になったりもするが。主旨は一貫している。誰でも理解できる言語で語れ、そう黒人弁護士は言っている。裁判に勝つためには、相手を説得し正義を貫く、そのような明快で分かり易い言語こそ必要なのであると。

ところで、今氾濫している情報関連の用語は、この「フィラデルフィア」に登場する黒人弁護士に弁護を引き受けてもらえるかどうか。答えは言わずもがな、であろう。

私もひとしなみに、パソコンを使う。原稿を書き添付ファイルにしてメールで送る。メールだけで使う場合も多い。検索エンジンやホームページを使って資料を集めることも多い。デジカメで撮った資料写真を保存し適宜利用している。本来の用途ではないので管財部の方から叱責されるやも知れないが、ゼミの学生が私の健康を案じてオムロン製のデジタル万歩計を、誕生日のプレゼントにくれた。その歩行記録を毎日パソコンに蓄積している。今月の一日平均歩数は七千歩とか、これでは少ないから来月は、などという利用もしている。３，４年の演習用に吉田ゼミのホームページも作っている。「教授紹介」「ゼミ研究テーマ」「活動内容」（原典研究・卒論研究・合宿等に分類）「掲示板」「酒悦会（ＯＢ）通信」「談話室」などを設けて学生とともに利用している。８年前に作成して、今 55700 件のアクセス数である。

「Ｏｈ－ｏ！ｍｅｉｊｉ」も多少は利用している。「クラス・ウェブ」も簡単なシラバス程度は掲げている。もっと使いたいという積極的な気持ちは勿論ある。「ポータル・ページ」もほぼ毎日みている。出来れば希望する先生には従来通り郵送するけれども、「ポータル・ページ」だけで「教授会」や「各種委員会」通知はこと足れり、とする先生にはそうしていくべきであろう。「Ｏｈ－ｏ！ｍｅｉｊｉ」システムで、記憶力の悪い私にとって役立つのは「専任教員データベース」である。このページは私の備忘録である。あまり肩肘張らず気楽に利用させてもらっている。必要に応じて自分史をそこから取り出すことが出来る。

無論明治大学のホームページもよく使う。

「教育の情報化」の表現に習えば、「私の情報化」はたかだかこのような有様であり、これ以上でもこれ以下でもない。とどのつまりは、素人なのである。素人の接頭語に「ド」が付く。

現在、納谷学長の下に「教育の情報化推進会議」を設置して、「教育の情報化」を全学的に推進するための教学組織を構築すべく検討を重ねている。仮称だが、「教育の情報化推進本部」を置き、その下に３推進部を配置する構想である。併せて既存の情報関連委員会や関連部署がそれぞれ縦割型議論や業務を、横との有効な関連・連携を持たず、不連続な作業を行ってきた弊害の改変をも目指すことになる。それは人の問題ではなかった。どんなに優秀な人材がいようと、システムが人の才能や能力を生かすことが出来なくなった。元々そうなのではなかった。有効に、初発の状況では各種委員会も各部署もみごとに機能していたのだ。どんなに優れたシステムでも、時経れば金属疲労を起こすのは、人間という生き物が作り出したシステムそのものが持つ宿命である。

「教育の情報化推進会議」の座長が、私なのだ。不適材不適所の典型的な、情報化につては素人の接頭語に「ド」が付く私なのだ。しかしこの会議にはきわめて有能なメンバーを迎えることができた。阪井和男情報科学センター所長、明治大学で最も長い委員会名、情報システムを利用するための教育・研究コンテンツ構築委員会、安蔵伸治委員長に加わってもらえたことで、「教育の情報化」における教学の全学組織構築は、具体化の確信を得ることが出来たのである。会議を支えてくれる職員の皆さんもまた俊秀であること、言うまでもない。

ただ失礼を顧みず、私は会議に参画されている皆さんに、「フィラデルフィア」に登場する黒人弁護士がトム・ハンクスに語る如く、私に分かるように話し議論をしてください、そうすれば、明治大学の全教職員が理解できます、と。私は１０歳の小学生なのだ。

「教育の情報化」を推進するためにこそ、「教育の情報化」を語る言語が、簡明で説得力を持つ言語として発語されることを切に願いたい。たとえば、「コンテンツ素材の調査から、素材のデジタル化、プロトタイプの作成、教材のコンテンツ化とシステム化などを推進するコンテンツプロジェクトを立ち上げ、次年度には学内の正式部署デジタルコンテンツラボを設置」する、という言語が「教育の情報化」を語る言語であって欲しくない。

「教育の情報化」とは、「大学空間に存在する教育・研究情報と教育・研究生活に必要な情報をサイバースペースに再現すること」であり、さらに個別具体的には「授業やゼミ、あるいは学生への自習支援などの通常の教育活動に情報メディアを活用する」することであるならば、是非ともその推進のために微力ながら皆さんとスクラムを組んで、出来る限り早急な実現方を図っていきたい。

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の意地」などと周りを頑なにさせないように、「教育の情報化」言語を、まずは共有する努力をしたいと思う。なおこの９月発行の「学長室だより」に「教育の情報化推進会議～議論の進捗状況と展望～」と題した拙文を載せてもらっている。併せてお読みいただければ、私のささやかな考えの一端はご理解を得られるものと思う。